

第5節 熊野堂遺跡第49号住居出土の装飾金具

東京国立博物館 加島 勝

熊野堂遺跡第49号住居址から出土した四点の金具は、いずれも鍛造製の銅版に文様を線刻であらわし、鍍金を施したものである。ここでは、これらの金具の製作技法と装飾文様について考えてみたい。まず、それぞれの形状を順に述べることにする。

1. 49住-3 (第57図)

銅版製、鍍金。長10.1cm (現状)、幅3.7cm。

銅版の先端を花形につくり、周縁に細い縁帯をめぐらし、中に宝相華唐草文を蹴彫りであらわし、地は魚天子打ちとしている。花形は中央を稜形に、両側を弧形とするいわゆる複合稜形につくる。先端部三箇所には鉋留めするための小孔が開けられている。宝相華文は両側にC字形の蕨手を伸ばした花形と葉形を交互に配している。二本の蔓でつながる花形と葉形が文様の一単位を成しているものと思われる。花形は中心を円形の花芯とし俯瞰形(斜め上から見た形)にあらわす。先端部に配された花形は五弁で、このうち手前側の四弁には一本の線で葉脈があらわされ、奥の花弁には小細線により縁取りがある。もう一方の花形は四弁で、手前側の花弁は先端部の花形と同様であるが、奥の花弁には水滴形に近い葉脈があらわされ、小細線の縁取りは四弁すべてに施されている。葉形は、小細線で縁取りされ、尖った先端と切れ込みのある輪郭をもち、水滴形を放射状に伸びる線で囲んだ葉脈があらわされている。

2. 49住-4 (第57図)

銅版製、鍍金。長7.7cm (現状)、幅3.7cm。

銅版の周縁に細い縁帯をめぐらし、内側に宝相華唐草文を蹴彫りであらわし、地は魚天子打ちとしている。現状、両先端部を欠失している。一方の切断部に鉋留めするためと思われる小孔の一部が半円形に残っている。宝相華文は、花形と葉形を交互に配したものである。葉形は、49号住-3にみられたのと同じものを大きくあらわしたもので、一方の葉形の水滴形は蓮蕾状を呈している。周縁との間隙にはC字形の蕨手が伸びる。花形は側面形(横からみた形)の三弁で、水滴形の葉脈があらわされ、小細線による縁取りがされている。

3. 49住-1 (第58図)

銅版製、鍍金。長12.6cm (現状)、幅2.1cm。

4. 49住-2 (第58図)

銅版製、鍍金。長5.3cm (現状)、幅2.2cm。

49住-1・2ともに、銅版の先端を複合稜形につくり、装飾文様を蹴彫りであらわしている。49住-1では先端部三箇所と現状中程の周縁二箇所に、49住-2では先端部三箇所に鉋留めのための小孔が開けられている。49住-1には三箇所に折り曲げた痕跡が残っている(出土時には中程で折り曲げられていた)が、鉋留めの位置との関係から、この金具が隅金具のように曲げて用いられたものではないことがわかる。装飾文様は水滴形の中を魚天子打ちとし、周囲に、先端に魚天子打ちによる小円

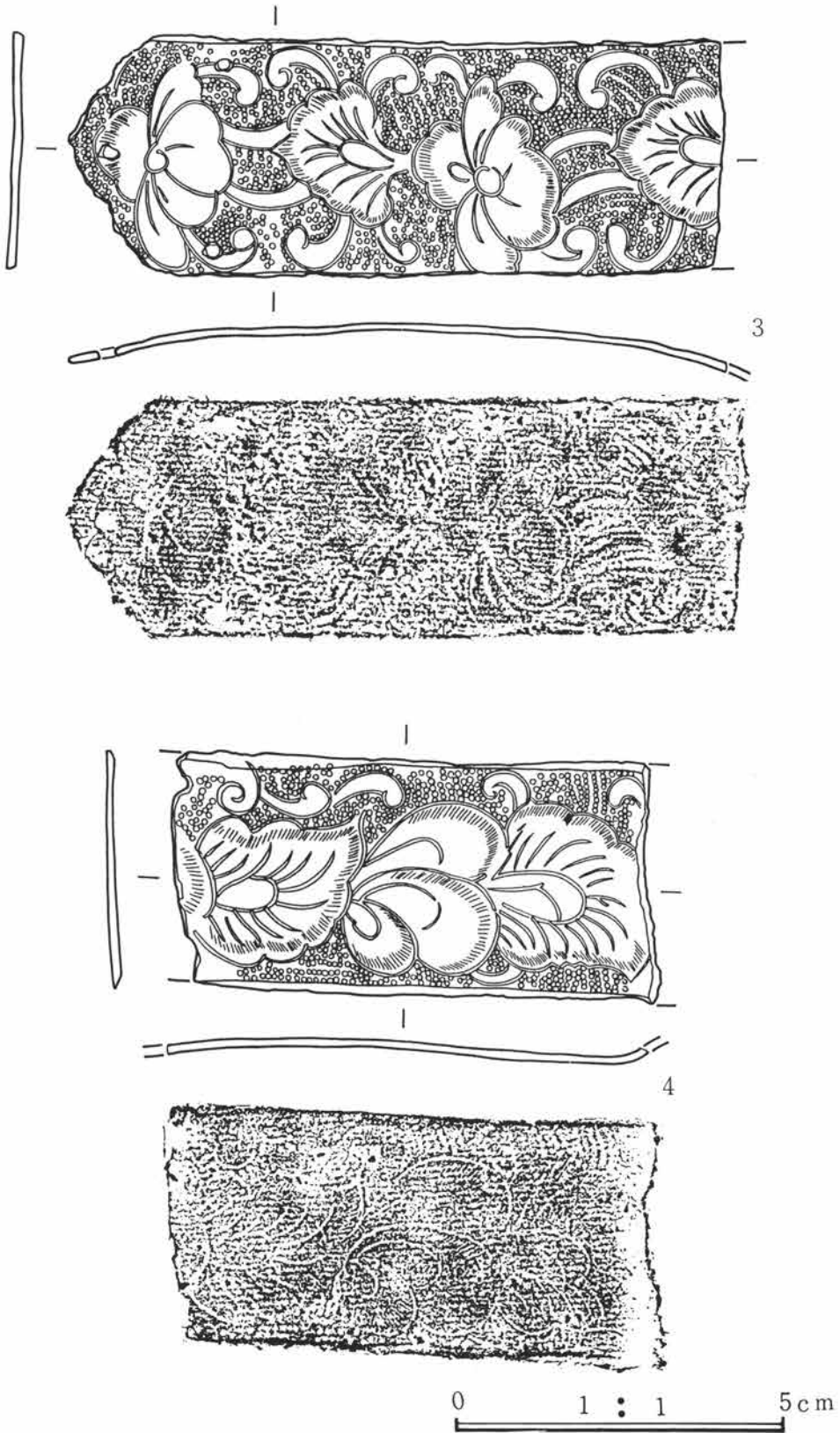
形をもつ放射状線をあらわし、その周囲をさらに小細線で囲んだものを一単位とし、これを連続させ、周縁との間隙にも小円形をもつ放射状線を充填している。この文様に見られる水滴形と放射状線は、49住-3・4の葉形の葉脈によく似ている。また、魚々子打ちした水滴形は蓮華文に見られるような子房と顆粒形をあらわそうとしたものかも知れない。そうであるなら、小円形をもつ放射状線は雄葉をあらわしていると解せよう。いずれにしても、この文様は植物文の構成原理から成り立っているといえるが、もはや空想の花葉形ないし花卉をあらわしたものであるというべきものであろう。

これらの金具は、現状ではいずれも一方の先端部ないし両方の先端部を欠失しているのが、当初は両端を花形につくったものであったと思われる。大きさ（幅）からは、49住-3および49住-4と49住-1および49住-2の二種類に分けることができる。これを文様の面からみると、前者ではその要素が花形、葉形、蕨手からなることや地文を魚々子打ちによっている点では共通しているが、49住-3は縦に、49住-4は横に文様が展開しているという違いがある。後者にはまったく同じ文様があらわされているが、その展開の方向からみて49住-2が49住-1のもう一方の先端ではない。このことからこの四点は三種類の金具の残片であることがわかる。このような形の金具は八双金具と呼ばれ、社寺などの扉や建築部材に打たれ、これを装飾するものであるが、本作例の場合、大きさや厚みからみてむしろ厨子、棚、机、卓といった仏具や調度品の装飾金具であったものと思われる。

この種の金具では、周縁に縁帯を線刻でめぐらし、その内側に文様をあらわすのが一般的であるが、49住-3および49住-4の見られる縁帯は線刻によるものではない。これは銅版を金具の形に切つてゆく際に垂直ではなく、やや斜めに切つていった結果、その断面が縁帯状になったもので、これが、製作時に縁帯を意識してのものかどうかは判然としない。仮にこれを縁帯と認めるにしてもきわめて細いものであり、また49住-1、2の方にはめぐらされておらず、これはこの金具の大きな特徴といえる。文様の線刻は、四例とも毛彫りではなく、鑿をらせながら打ち込み、楔形を連続させて線をあらわす蹴彫りである。49住-3、4の地文の魚々子打ちは、文様の輪郭や周縁に沿って規則的に打っているところと、まばらに打っているところがあって整然としたものではない。これと49住-1、2の水滴形の内部と周囲に放射状線に見られる魚々子打ちは同じ鑿によるものと思われる。

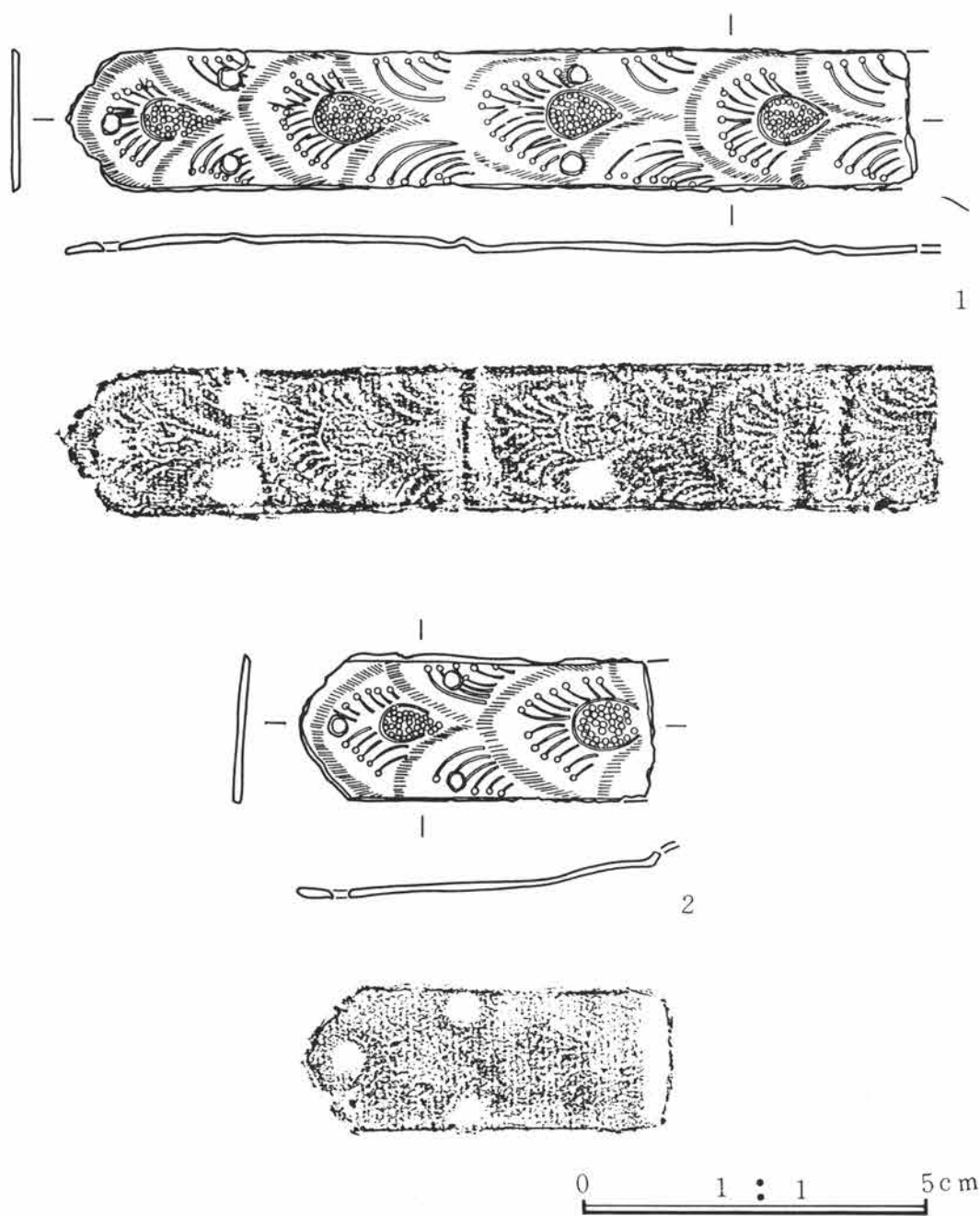
49住-3や49住-4にあらわされているような側面形や俯瞰形の花形と葉脈つきの切れ込みのある葉形からなる宝相華文は唐朝以来の伝統を引き継ぐ文様で、我国においても天平期以降その影響を受けながら多様な展開を示したことが知られている。宝相華文を線刻であらわした金工品で製作年代を微証できるものには、天暦11年(957)銘を有する金銅如意(東京国立博物館保管)、長元4年(1031)の製作と考えられている横川根本如法堂址出土の金銅経箱(延暦寺蔵)、天喜元年(1053)の製作と考えられている平等院鳳凰堂天蓋の八双金具(平等院蔵)などがあげられる。なかでも天暦11年銘金銅如意に刻まれた小細線のある五弁の花形をはじめ蓮蕾状の紡錘形を葉脈で囲む葉形や蕨手は49住-3や49住-4のものに近いものである。これと比べてみると49住-3や49住-4の花形や葉形の水滴形、さらに蕨手の形態は精緻さに欠けているとはいえ、その製作年代は同時期すなわち平安時代半ば頃、10世紀後半から11世紀にかけてとみてよいと思われる。また、49住-1と49住-2製作技法が同じであることからみて、本来これと一具をなしていたものであろう。

平安時代にさかのぼるこの種の金具の出土はきわめて稀なことといえ、またそれが竪穴住居跡から



第57図 装飾金具

出土したことは本来の装飾金具とは違ったものに転用されていたことが窺われて興味深い。こうした意味で本例のもつ資料的価値には高いものがあるといえよう。



第58図 装飾金具